

題目：人はいつ神さまのせいにするのか？：想起法を用いた実験的検討

氏名：前井のどか

指導教員：竹澤正哲准教授

要旨

地震や津波で多くの人々が亡くなるなどの「大きな被害」が出たときに、人はそれを「神のせいだ」と感じやすいと言われている。この現象が本当に存在するのかを検証するため、本研究ではシナリオ想起法を用いた実験を行った。シナリオは川の増水によって家族に被害が及ぶという内容で、増水の原因が「作業員」・「神」・「自然災害」の3種類、増水による被害が「家族が全員死亡する」・「家族の食事がだめになる」の2種類で、それらの組み合わせによって計6種類のシナリオを作成した。これを参加者に読んでもらい、覚えている内容を書き出してもらった。参加者が書き出した文章を、記憶されていた意味の量と、正確に記憶されていた単語の数の2種類の方法で数値化し、分析に用いた。その結果実験1では、作業員や神が原因のときの方が、自然災害が原因のときよりもシナリオの意味をよく記憶しており、正確に覚えているという結果が得られた。しかし、被害の大きさによってシナリオの記憶量や正確さに違いはあまり見られなかった。そこで実験2では、実験1でシナリオの最後にあった「被害の記述」を最初に変更することで、その後のシナリオの読み方にどんな影響があるのかを調査した。分析の結果、実験2では被害が大きいシナリオでのみ、神が原因のときの方が作業員や自然災害が原因のときよりも、シナリオの意味をよく記憶しており、正確に覚えているという結果が得られた。以上の結果から、被害が大きいときは、人や自然災害が原因であるという話よりも、神が原因であるという話の方が記憶に残りやすいということが分かった。これは、大きな被害に見合うだけの原因を見つけ出したいという説明欲求が働くため、神に原因帰属しやすいと推測する。物事の関係性を説明しようとする人がより生存に有利であったため、人は正しい説明よりも一貫性のある説明を求めるとされている。そのため、すべての物事を説明可能な神という超自然的な存在が説明として最も用いられやすいと考えられる。